

## 近代日蓮宗の動向

——加藤文雄についての一考察——

安 中 尚 史

近代初期は既成仏教教団にとって多難の時期であった。江戸時代の安逸になれた仏教界に対しての批判や不満は政府の宗教政策とかさなりあい廃仏毀釈という激しい仏教排撃運動をひきおこした。明治元年から数年におよぶこの運動は全国的に拡大し、仏教界を混乱させ一時その勢力は衰微した。しかし仏教界も江戸時代の保護を反省するようになり、仏教革新運動がすすめられるようになった<sup>(1)</sup>。そのような中で日蓮宗においても例外ではなくその内外で様々な運動がみられた。

宗門の内にその運動の場を持っていた人たちの代表に「明治中興の三師」として仰がれる新居日薩・吉川日鑑・三村日修の三人があげられる。この三人は充浴園の出身者で、このほかにも当時の政府の宗教政策に対して宗門

を支えた人たちの多くは優陀那日輝の薫陶をうけたものたちだった。その中でも特に新居日薩は初代日蓮宗管長として宗門の行政・教育・布教など多面にわたって活動し近代的教団の基盤を形成し再建に尽した。

これに対して宗門の外にその運動の場を持っていた人に田中智学・本田日生・高山樗牛・宮沢賢二・清水梁山・妹尾義郎などが代表としてあげられる。彼らの活動には大きな違いもみられるが、その根底には日蓮主義というものがあり時代の歩みに応じて展開していた国家主義などと関係が持たれていた。また新興宗教の世界に運動の場を持っていた長松清風などもその中に加えることができる。このほか近代的な学問研究の方法も次第におこなわれるようになり、文献学的な側面からの研究が小川泰堂などによっておこなわれた。

そして、現在まで近代初期の日蓮教団に関する研究の

対象は先にあげた人たちを通して見られたものが中心であった(2)。そのような中、今まであまり研究の対象とならなかった人に『日蓮聖人御遺文』(縮冊遺文)の編集者であった加藤文雅という人がいる。

加藤文雅(3)は慶応三年(一八六七)一月三日武蔵国馬込村に生まれ、幼ない頃から日薩の薰陶をうけ大寺院および大檀林で学んだ。その後は池上にあった大檀支林の教師となり学生の指導にあたっていった。その間、キリスト教や浄土教などに対する破折を行ない、また従軍布教師として宗門からの最初の派遣に加わり、明治二十八年(一八九五)三月から六月までの三ヶ月間、従軍僧として中国大陸で活動した。帰国後、同年十月から『日宗新報』の編集および経営にたずさわるようになり、また立教開宗六五〇年を記念して『日蓮聖人御遺文』を発行し、『高祖遺文録集註』・『御本尊写真版帖』などの編集にもたずさわっていた。そして『註法華経』・『御義口伝』・『日向記』の編集を半ばに明治四十五年(一九一二)五月二十七日、四十六歳にして没した。その間、池上南之院・林昌寺・静岡村松海長寺の住職を歴任した。

そこで近代日蓮宗の動向をみる一つの手掛りとして、宗門のプロデューサー的存在であった加藤文雅が、彼が

まだ編集にたずさわる以前に『日宗新報』に寄せた文献をとおして宗門内外にあった問題について考察していきたい。

## 二

最初に『日宗新報』について少しふれたいと思う。この『日宗新報』は宗門の報道機関誌および教誌的存在として宗門内外に大きな影響をあたえていた。その前身は明治十三年(一八八〇)四月に創刊された『妙法新誌』にさかのぼり、明治十八年(一八八五)年十二月に『妙法新誌』を合併し『日蓮宗教報』(4)として創刊された。そして明治二十二年(一八八九)一月に『日宗新報』と改題され大正六年(一九一七)まで刊行された。

では加藤文雅が『日宗新報』に寄せた文章について見ていきたいと思う。

今回の調査では立正大学図書館ならびに日蓮教学研究所所蔵による『日宗新報』でおこなったが一部、史料の破損、欠落があったことを付記しておく。また〈資料〉明治二十八年(一八九五)九月最終号までの加藤文雅が寄稿した一覧なので参照されたい。

〈資料〉

加藤文雅『日宗新報』寄稿一覧

発行年月日 (号数)

明治二十三年十二月	十八日	(三五七)
明治二十四年三月	十三日	(三七〇)
明治二十四年三月	十八日	(三七一)
明治二十四年七月	八日	(三九三)
明治二十四年七月	十三日	(三九四)
明治二十四年七月	十八日	(三九五)
明治二十四年七月二十八日		(三九七)
明治二十四年八月	三日	(三九八)
明治二十四年八月	八日	(三九九)
明治二十四年八月	十三日	(四〇〇)
明治二十四年八月二十三日		(四〇二)
明治二十四年八月二十八日		(四〇三)
明治二十四年十月	八日	(四〇九)
明治二十四年十月	十八日	(四一一)
明治二十五年十月	五日	(四五九)
明治二十五年十月	十日	(四六〇)
明治二十五年十二月	二十日	(四七四)
明治二十六年三月	三日	(四八九)
明治二十六年三月	十八日	(四九二)
明治二十六年五月	三十日	(四九五)

「題名」

「宗政私議」

「信心唱題の喩」

「増上慢」

「元寇予言の一事何ぞ能く日蓮大士を軽重せん」

「」

「」

「」

「」

「」

「」

「」

「仏教統一論 上」

「仏教統一論 中」

「人類と禽獸との別を論じて基督教國人に告げんと欲す」

「遺骨を送りて祖山に登るの日記」

「」

「」

「」

「」

「」

「」

明治二十六年	六月	三十日	(四九八)	「仏教病院博愛館の開院を祝す」
明治二十六年	六月	三十日	(四九八)	「三曜紀行」
明治二十六年十一月	一月	三十日	(五一三)	「答或人間」
明治二十七年	一月	五日	(五一七)	「教学雜俎」
明治二十七年	一月	三十日	(五一九)	「
明治二十七年	二月	十日	(五二〇)	「
明治二十七年	二月	二十日	(五二一)	「内務省訓令第六号を読む」
明治二十七年	三月	十五日	(五二四)	「全国卒業生諸彦に議る」
明治二十七年	三月二十五日		(五二五)	「教学雜俎」
明治二十七年	六月	八日	(五三一)	「道風教光(一)」
明治二十七年	七月	五日	(五三四)	「道風教光(二)」
明治二十七年	八月	八日	(五三七)	「
明治二十七年	九月	八日	(五四〇)	「渡韓両師治道見送の景況」
明治二十七年	九月	十八日	(五四一)	「
明治二十八年	一月	八日	(五五〇)	「軍人法話 生死解脱」
明治二十八年	四月	八日	(五五九)	「從軍日記」
明治二十八年	四月二十八日		(五六一)	「
明治二十八年	五月	八日	(五六二)	「
明治二十八年	五月二十八日		(五六四)	「
明治二十八年	六月	八日	(五六五)	「
明治二十八年	六月	十八日	(五六六)	「
明治二十八年	七月	八日	(五六八)	「
明治二十八年	七月二十八日		(五七〇)	「

明治二十八年 八月二十八日(五七三) 「從軍日記」

\*今回調査の『日宗新報』は立正大学図書館・日蓮教学研究所在蔵によるもので行なつたが一部破損・欠落があることを御諒承いただきたい。

この中で明治二十三年(一八九〇)十二月十八日発行の第三百五十七号に寄せた「宗政私議」では当時の宗門内でみられた諮問總會事件(5)に対する見解が述べられている。この論争は身延山久遠寺の中心体制化を進めようとする身延側と京都妙頭寺・本国寺・池上本門寺・中山法華経寺を中心とする諸本山の本末關係を維持し、基盤を守ろうとすることの対立で宗門内を分断した大きな争いであった。この対立について加藤文雅は次のような見解を著している。

吾宗に於ける三年以来の紛争もこの国民の記念すべき議會開会の前月に於て兩党明約し宗務院に會して調和の式を挙げたり吾曹豈之を欣賀せざらんや然に其調和の事未だ一宗細素の耳に普及せざる既に再然し禦くべからざる勢ひあるが如し吾曹豈憂ひて愁へざるべけんや(中略)噫々三年可惜光陰を費し匱乏の資財を費し猶悔悟せず輪贏を毛髮の間に争ひ靡学類教一宗をして累卵の危に至らしめ社会の侮蔑を意となさざるに於ては吾曹為に潜然として泣き漣然

として血涙の法衣を湿すを知らざるなり嗚命一宗は調和せりと、調和せる一宗猶斯の如きか嗟矣一宗未だ調和せざるなり調和と云ふは其表面上の式のみ調和の実未だ成らざるなり而して調和の実を得る能はざる蓋し所以あらん請ふ徐に之を論ぜん

このように一度は和解が成立したにもかかわらず対立がまだ続けられていることに歎き、加藤文雅自身は身延側にも本山側にもつくことなく速やかに本當の和解を求めていた。しかし翌二十四年(一八九一)一月にはこの形ばかりの和解も破談となり、この問題の解決にはもう少し時間が必要となった。またここでは同時に彼自身の「宗教」および「宗教家」に対する考えが次のように著されている。

抑も宗教なるものは社会整理の必要原素にして社会の腐敗を匡救し人心の騒揺を静定し常に社会の安寧秩序を保護すべきものにして宗教家たちの亦動ぜざる山の如く寛厚温譲なる器量を有し不屈不撓の精神を鼓舞し身社会の標準となり綽然余裕を示し以て

社会の先導者たちの任を全ふすべし

このように「宗教」・「宗教家」に対してきびしい意見が述べられ、これも当時の宗門内の不安定な情勢に対するものでこの論争を加藤文雅は批判的な視点からみていたことが一層理解できる。

次に宗門の外に目を向けているものとしてキリスト教に対する批判を見ることのできるものを取りあげてみることにする。

明治二十四年（一八九一）十月八日発行の第四百九号と同月十八日発行の第四百十一号に寄せられていた「仏教統一論 中」では次のように著されている。

彼等が現世期に於ける勢力は決して仏教を攪破するに足らずと雖も仏教徒たるもの寧ろ目下の虚勢に眩惑せられて得々揚々たる可んや彼れ外教徒が今日に於て蓄積する者は実に将来の日本人を左右すべきの尤も恐るべき潜勢力なりとす（中略）況や彼れ邪教は吾国の国体に反悖し国情に適當せざるものなるをや彼れにして吾国に行はれんか国家の危難之に加るなし嗚呼今後の日本に対し永遠に国家の安寧秩序を保持し国体の天壤無窮を保ち国情の剛毅朴直を維がんことは仏教に非ずして何ぞや

これによるとキリスト教によって教団がふみにじられようとされ、そして国の体制にそむいてその情勢にそぐわない宗教だとし日本には仏教をもってほかに考えることはできないとまで著している。しかし次にあげる史料ではそのキリスト教の勢力が大きくなることに不安を持っていることがわかる。

上帝教なる舶来宗を見ようとその教理の小説的なるにも拘はらず財識両者の豊富に依て教育慈善等の啗誘手段を自在にし以て吾民を籠絡せんとする嗚呼彼は豊富にして吾は貧困なり彼れに巧妙の手段あるも吾には守株の一方便を存するのみ吾は国民の膏血に衣食し邦家の厄介物たり彼れは国民を啗誘して第二の恩父母たらんとす吾は奪ひ彼は与ふこれに対して各教団も力をあわせなければキリスト教には太刀打ちできないことを予測してそのためにも各宗派は争うことなく統一することを望んだ文章を次のように著している。

各宗相敵視し是非相争ひ邪正相闘き各祖意を確守しつつあるをや（中略）仏教の教理を一定し以て諸宗を網羅するに足らしめ其門戸を広ふして之を統一すべし抑も仏教なるものは其教理の基礎に依て組織せ

られたるものにして、釈尊の教化八万四千の法門五十年の説教妙にして、広大なり、縁に随て化を設け、各其趣を異にすと、雖も亦実に一定の教理なくんば、あらず

しかしここで考えねばならないことに、加藤文雅は他の宗派に対して否定的な考えを持っていたにもかかわらず、仏教各派の統一をうたいあげていることである。他宗派に対する否定的な考えを寄せている日宗新報は今とりあげたものの前後にある。

明治二十四年（一八九一）三月十三日発行の第三百七十号の「信心唱題の喩」では次のように著されている

各宗覺を並べ諸派軒を連らぬ、就中如来出世の本懐として、上行菩薩に譲り給ひし末法時機相應の妙宗は、疑然として八宗九宗の天表に聳へ、外道邪教の雲端を凌ぐ。若し夫れ宗教の中に於て宝の山里と問はば、妙宗こそ宝山中の宝山なるべし

ここでは他宗派に対して直接批判はしていないが、日蓮宗が他宗派と比較して勝れていることが理解できる。

また明治二十七年（一八九四）年六月六日発行の第五百三十七号の「道風教光（一）」で、茨城県真壁の日英寺において公演をしたことについて次のように著されている。

我れ信教上国民の義務を論じ、基督教浄土門を対破し、真言禪の二宗を折伏し、終に本宗の教義を述べ、日没頃壇を下る

これによると、キリスト教・浄土教を対破し、真言・禪の二宗を折伏したことに、ついて公演したことがわかる。

このように、仏教統一を論じた前後に、日蓮宗が最も勝れた宗派だといったり、また浄土破折、真言・禪の折伏といったことが紙面に掲載していることについて、疑問がのこる。ただ一つわかることは、当時のキリスト教の勢力が大きくなり、これに対する加藤文雅自身の批判は非常に激しいもので、それは明治二十五年（一八九二）十月十五日発行・第四百五十九号・同月十日発行・第四百六十号の「人類と禽獸との別を論じて基督教國人に告げんと欲す」また明治二十六年（一八九三）十一月三十日発行・第五百十三号の「答或人間」にもキリスト教に対する批判が寄せられている。

以上のことからすると、日蓮宗、および仏教に対する危機が加藤文雅自身の中に感じられ、そのための仏教の違った意味での統一、いいかえれば協力が必要だということとを述べたかったのではないか。

以上、明治期における宗門の内外にあった二つの問題について加藤文雅という人を通して考察をすすめてきたが、近代という不安定な時代のためまだまだ多くの問題がかかえられていたことであり、それに対応すべく人たちの活動が活発に行われていたことであろう。今後も当時の社会状況をふまえ、また他宗の動きも同時にみながら、その動向について考察をすすめていきたいと思う。

註

- (1) 辻善之助著『日本仏教史』近世編之三・四  
 (2) 近代の日蓮教団および教学史をテーマにした研究は多くの先師によっておこなわれておりその代表的なものとして、望日歎厚編『近代日本の法華仏教』・中濃教篤編『近代日蓮教団の思想家―近代日蓮教団・教学史試論』・『講座日蓮四巻―近代日本と日蓮主義』などがあげられる。  
 (3) 『日蓮宗事典』四六六頁・『日宗新報』  
 (4) 『日蓮宗教報』の発行部数は明治二十一年(一八八八)十二月現在で一号あたり四二、四三〇部であった。(明治二十二年二月十四日発行官報『明治ニュース事典』毎日コミュニケーションズ)  
 (5) 新井智清著『近代日蓮宗の宗教』